

それ故奉行も慶応三年までいます。

弘化三年より 牧田貫一郎
嘉永元年々 務川忠兵衛
安政七年 牧田貫一郎
万延元年 国嶋何右衛門
慶応元年 臼倉 國藏
全二年 野沢宇之助
飯田藩領から「伊那県」へ移る場合も事務処理は少しおくれるわ

伊那史談

「阿島流れて婦牛原焼けて加々須大島金」
が降る」という歌がありますがこれは何を
意味するのでしょうか。

(中部電力飯田支社 宮内昭夫)

※阿島は加加須川や天竜川の汎濫で折々水
害に見舞われ、婦牛原は原畑地帯で干害
にあう、山分の加々須や大島にはそうし
た天災がなく、雷雨も時々あって早害も
なく豊作だとの意味の俚語ではないでし
ょうか、尚よく研究してみ下さい。

けです。

伊那郡での藩(大名)預りの例は小笠原氏が松本へ移封元和三年
脇坂氏が飯田藩主になる天領の期間は松本藩預りのようですし、上
伊那では寛保三年以来「松本藩預り」になっている村もありますし
文久三年から慶応三年までの期間飯嶋代官所の支配地が「松本藩預
り」になっています。その期間に白河藩領が天領になったので前に
関係のある村々でありますので「飯田藩預り」となったと考えられ
ましょう。(筆者 飯田市下久堅北原)

(上村 宇佐美虎之助)

平沢先生のお考え通り秋葉街道は古はく
善光寺道と申して東海道浜松より秋葉山を
かけ善光寺に通ずる道で門村を通り小川路
峠を越えたのであるが相当古い道であると
思います。峠すじの内カンバ沢で氏乗洞に
下り氏乗沢の桃畑で合い小川に出たと思い
ます。桃畑よりカンバ沢まで上る道に親世
音が何ヶ所にも記つて有りましたが今は洞
があれで無くなったかも知れませんが、其一
体がカンバ沢には今も有ると思ひます、越
久保より小川路峠までの三十三番の観音よ
りはるかに大きくて立派でありました。善
光寺道が古い名で秋葉街道は明治十六年こ
ろ県道に編入されての名称だと思ひます。

○ 喬木村の段丘は小川川と加々須川溪谷よ
つて三つの原が形成されています、その三
つの内一番北の豊丘村寄に在るのを城原と
云います。その城原にケチ田と称されてい
る水田が一枚あり、之れを所有又は耕作す
る者は不幸を招くと伝えられていました、
ケチ田附近の僅かな部分は昔からの水田だ
と思はれるが大部分は明治二十年頃開田さ
れた十町歩程の狭少な原ですが、昔城があ
ったと思はれる地勢の所があり附近には城
の縁のある地名もあります。城原の地名の
由来を知りたいと思ひます。御示教下さい。
(喬木村阿島 松沢庄太郎)

坂戸橋際で拾ったワラジ

― 天竜川での、川漁のワラジ ―

向山雅重

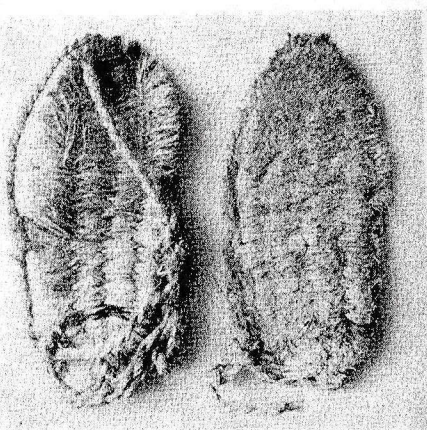
昭和四十二年八月三十日、天竜川に架っている坂戸橋(長野県上
伊那郡中川村)の西たもとで、自動車から下りると、その足許に、
一足のワラジが脱ぎ捨ててあるのが眼についた。

さっそく拾いあげてみると、天竜川へ漁にきたひとが、帰りがけ
に脱いで置いていったものらしく、水の中を歩いて歩いたらしい隙
れたかたをしており、漁を終ったひとが、ここでほかの服物と脱ぎ替
えていったらしい姿が、いかにも自然に感じられたのであった。

ここは道の側に植えられた桜並木のもと、朝からの強行で疲れた
自分たちは車をとめて、ここで持参の昼食をとることにした。高み
から見下ろす堤防の上を、投網を持った人が歩いている。おそらく
このワラジの主も、この桜並木の下で、川漁の支度を整え、鮎の友
釣か、投網に天竜川へ下りていったのであろう。そして、楽しい一
日を過ごし、ふたたびここへ戻って濡れたワラジを脱ぎ捨て、恐ら
くは鮎さきの姿にでもなつて帰って行ったというものであろう。

ワラジはゴンゾワラジ。穿いて漁に出掛けたまま一度も右と左と
を穿き替えることをしなかつたらしく、足の外側の方へ踏み広げら
れたままの底の姿が鮮やかである。底のつま先とカカトにあたる部
分には紺色の布片れが作りこんであり、紐は太く頑丈である。ゴン
ゾワラジの特長である作り込み――チ(乳)を付けず、ほぼ左右の
乳の位置で底へ紐を作り込んである――が短かく、穿く時に紐を一
度作り込みのところへ結ぶような形に引掛けるのがきつちりしてい
て快い。

ゴンゾワラジの第二の特長は、紐の一方がヘビグチ(蛇口)とよ
ばれる輪になっており、一方の紐をこのヘビグチに通して止めるよ
うになっていることであるが、このワラジを穿いたひとは、通した
紐を折り返すようにしてそこで簡単に結ぶか、二、三回くり返して
引っ掛けるかして止めたらしい。このヘビグチへ通して止める方法
は、水の中へはいってワラが硬くなつたりしても、紐がほどけるこ



拾ったワラジ

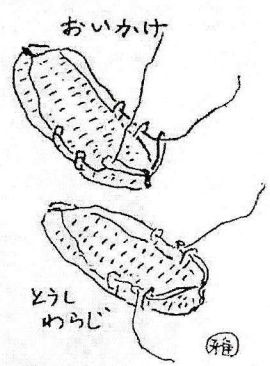
とがなくて具合がよい。この止め方を徹底的に完全にするには、ヘビグチを通して穿き具合をよくみた上で、一度結んで結び縹をこしらえ、残りを切捨ててしまうことである。穿くには縹を通し、脱ぐには縹をはずせばよい。

ところが、このひとは結び縹にしない。ふしぎに思つて、ヘビグチをよく見るに、このヘビグチの作り方が一般とやがちがつてゐる。ヘビグチは、上伊那郡宮田村あたりでは、一般には、紐を調

う一ばんはじめに、細いを縄ワラの中央で左縄に二寸ほどない、それを折返してヘビグチにして、右縄になつていく、紐の長さの決定はヘビグチを右手の親指と人差指とで持ち、のばして、右腕までの長さをとり、そのあと手を左右にのばして一尋の長さのところで止める。つまり「一腕と一尋」の長さ、ゴンゾワラジの紐の長さである。作るときは、この一腕の長さのところで目安にし、この長さを片側の紐に残し、あとを底の芯にして作っていく。

ところが、このゴンゾワラジを作る人は、はじめやや細い左縄を六寸ほどなつて、それを折り返して、右縄の紐をなつていく方法をとっている。そのためヘビグチが大きく、二寸五分ほどの長さになっている。これではたとえヘビグチはカエリに通すとはいふものの結び縹を通して止めるには少し不安定であらう。そんなことから縹止めせず、折かへして引掛ける止めに穿いたものであらう。

伊那谷で、ゴンゾワラジをもつとも一般に用いるところは飯田周辺ということができるであらう。上伊那では南部に若干あり、すでに宮田村あたりでは、昔、山仕事をよくした家にそれが伝つてゐるぐらゐなものとなつてゐる。とすれば、このヘビグチの作り方は飯田周辺の一般的な手法かもしれない。この坂戸橋の西袂へワラジを脱ぎ捨てて行つた御仁は、おそらく飯田方面から、たまさかの休日か何かを川魚の楽しみに来られたものといふことになる。



ウグチワラジ」とにわかれる。このゴンゾワラジはその「ドジ」ウグチへ「泥鰌」の姿が著しい。これはワラジをはいたと

ジの外へ出るから、その働きで、足の確保がよくできるので、効果が良い。ことに水の中へはいったとき、このことは大切であつて川魚にワラジを穿いていくのは「水の中で足を滑らせない」ためである。それには、現想的に言へば、素足にワラジを穿く。スワラジが一番効果があるわけで、爪先はアシノユビが外へ出て、ユビのハラで、確保が確保にできるのである。

このゴンゾワラジの主も、恐らくこれを素足に穿いたらしく、尖つた爪先の部分に、そのアシノユビの型を感じるほどである。

スワラジで天竜の流れにはいるとすれば、これはただの趣味人ではなく、相当に腕達者な鮎掛け——鮎の友釣のベテランとでも言うべきではなからうか。

鮎掛けは、ともすれば腰まで届くほどの水深の激しい流れにはいつていく。そこでは足の確保が最も重要になつてくる。ワラジを穿いて滑り止めをする、ことに爪先を効かして足を確保する、それにもう一つ、足の土フマズやカカートのところで、ワラジとの間へ砂や砂がはいったとき、それが自然に早く流れてしまうことが大切な要件になる。

それには、ワラジのカエリがないことが一番よい。それで、アジナカの鼻緒をたてすにおいて、本来の横緒をアトカケにし、芯縄を横緒にして穿く。拙称「アイカケワラジ（鮎掛草鞋）」が、天竜川では上伊那の殿島橋附近で行なわれている。

それに次ぐものとしては、このゴンゾワラジは、カエリへ紐を直ぐ通して穿くから、カエリが少し上目にあがるので、案外に踵とワラジが密着してゐながら、また離れ易い点もあつて、砂や礫が間へはいったとき案外にうまく流し出してしまふ。

南信十ことに伊那地方のワラジのカエリは、一般にいつて、カエリの先を乳へ通してから、そこへワラジの紐を通す——言わば「長カエリ型」である。これは南安曇郡奈川村神谷奥原誠翁によれば「トウシワラジ」と言つてゐる。

これに反して、北信方面では、ワラジのカエリは、一般に言ってカエリへ通さず、紐を乳へ通してきてからカエリへ通す——言わば「短カエリ型」である。これは奥原誠一翁によれば「オイカケ」と言っている。

ゴンゾワラジのカエリは、結局、短カエリ型——「オイカケ」と同じ効果を發揮している。

ところで、昭和四十一年七月伊那市のR釣具店、同じく九月伊那市のT釣具店で一足四十五円で求めた魚釣り用のワラジは、いづれも諏訪方面からの仕入れだということであるが、四乳ワラジで、これは上伊那地方一般に四乳ワラジのカエリが「長カエリ型」——つまり「トウシワラジ」であるのと反対に、いづれとも「短カエリ」——「オイカケ」になっている。このことは、ゴンゾワラジのカエリの場合と同じ効果であつて、川魚に具合よいわけである。伊那市附近で、この「オイカケ」になっている四乳ワラジが愛用される所以も納得できるわけである。

上伊那地方で、昭和四十一年度天竜川水系に放流した鮎は、三十五万尾。そのうちこの坂戸橋の上の本郷と、下の天の中川橋附近とに放流したものは五万四千尾だという。

その鮎の成熟をねらつて、坂戸橋から天の中川橋方面に鮎釣りに集まる人は、上伊那南部からと、飯田方面からとが多いことは自然

である。そのひとりが脱ぎ捨てていったものがゴンゾワラジであることも、いかにも自然。そのワラジがゆくりなく通りかかった私に

昭和41年度鮎放流数 計 35万尾

長野地区			駒ヶ根地区		
6/2	万五郎橋	15,000	4/24	下平(海)	20,000
6/8	宮木城前橋	24,000	6/2	小鍛治	15,000
6/22	辰野大橋	15,000	6/8	小鍛治	24,000
			6/22	下平	15,000
箕輪地区			南部地区		
6/2	松島	15,000	6/2	中川橋	15,000
6/8	木の下	24,000	6/8	本郷	24,000
6/22	沢	15,000	6/22	中川橋	15,000
伊那地区			東部地区		
4/24	西春近(海)	20,000	6/2	藤沢川	7,500
6/2	毛見橋	15,000	6/2	山室川	7,500
6/8	水神橋	24,000	6/22	藤沢川	7,500
6/22	北殿	10,000	6/22	山室川	7,500
6/22	藤沢川口	15,000			

・(海)は海産で、その他は全部湖産
・昭和41年7月1日 天竜漁業協同組合発表

いろいろと語りかけてくれることは嬉しい限りである。

(昭和四一・九・二二記) (筆者 長野県上伊那郡宮田村田中)

江戸末期葛島のあれこれ

— 残っていた私的古文書 —

下 平 加賀雄

- 一 引き起こし株
- 二 釣り頭はこうして決めた
- 三 非人小屋出生のつま女(以上本号)
- 四 佐平に手きずを負わせた事
- 五 伊兵衛田島にて狂死
- 六 たけと申す女離縁
- 七 下作人が家内となる
- 八 家普請と土蔵ふしん(以上十二月号)

はじめに

この記録は旧南河村葛島葛北の古類、森本喜重氏宅に保存されている形ただし文書の中から江戸時代末期の農家の租々相を抽出して現代の世相とかなり隔たっていることを認めて見たい。

一貫したテーマのものでなく、あれやこれや、とりとめもない事はかり羅列したまでのものではあるが、それはそれなりに封建色の濃い農村の実態がうかがわれて面白いと思う。

この家は代々喜左衛門を世襲している、南に張原、北に高垣外と

いう名主格の家の間に挟まれてはいるが組頭を勤めることが多く、お舟事件、中馬事件、井の争議、入会山問題には、率まつられている名主さんよりも実際にその衝に當って樽廻折衝する利役者であった。

一 引き起こし株

此の度村中相談の上百姓株取究被成候に付先年伊兵衛百姓株暫く断絶いたし、寺役並に墓所等に至迄掃除候もの無之、敷ヶ敷義に付余類のもの相談仕、今般我等扣の地の内、字坊垣外にて屋敷貳畝九分の地相渡し、右伊兵衛跡相続いたし永百姓立て候様仕度、依之右地所別紙証文を以て御願申上候間高分に成被下度、五人組の義は頭嘉八江御加可被下候段奉願上候、若し百姓株に付彼れ是れ申すものござ候へ、名前の者其何方迄も罷出急度埒明御役本に少も御厄介御世話等決而相掛申聞敷候、仍而連印一札差上申所如件

天保五年二月

願本人

喜左衛門